

口上林などで教師として活躍した岩本忠ただお焉な

(1857～1918)の父忠左衛門(182

4～1891)は、口上林地区十倉の旗本谷

領で江戸時代最後の代官を務めた人物である。

里町の市資料館は30日から11月28日までの約

1カ月間、忠左衛門が書き残した日記などの

古文書を中心に「忠左衛門代官日記」と題し

た第12回特別展示を行う。

最後の代官 忠左衛門日記

忠左衛門は十倉領代

官・道家助六郎の次男と

して十倉志茂町に生まれ

天保14年(1843)、

谷家の有力な家臣だった

本紙でも忠左衛門の「奮闘」紹介

岩本家へ養子として入った。その後、実父助六郎の後を継いで安政4年(1857)に代官となるが、明治維新後に帰農。6年には十倉中町にあった小学校の分校の管理人となり、明治24年に62歳でこの世を去った。岩本家へ養子として入った。その後、実父助六郎の後を継いで安政4年(1857)に代官となるが、明治維新後に帰農。6年には十倉中町にあった小学校の分校の管理人となり、明治24年に62歳でこの世を去った。

幕末から明治維新にかけての激動の時代を生き抜いた忠左衛門は、代官になる少し前の安政2年5月から日記を書き残している。日記には、ペリー来航の際に急ぎよ江戸へ行ったことや、戊辰戦争後の様子など、当時の社会の動きやその影響までもが克明に記され、地方に住む代官の目から見た明治維新前後の世相を知ることができるとができる。市資料館に、忠左衛門の日記など十倉領の歴代代官らが残した古文書1千点以上が、東京に住む忠左衛門の子孫から寄贈された。特別展示では、この岩本家文書に焦点を当て、忠左衛門の日記を中

十倉領代官・岩本忠左衛門の日記を市資料館が特別展示

代官の見た幕末～維新が克明に



特別展示の主役となる岩本忠左衛門の日記